

霞ヶ浦流域の環境保全と持続型社会の構築をめざす市民型公共事業 ～アサザプロジェクト～

2003年11月19日

特定非営利活動法人 アサザ基金

代表理事 飯島 博

1. Description of the Problem and Action as Implemented

(問題と実施されている取り組み)

霞ヶ浦は日本で2番目に大きな湖で、湖面積は220平方キロメートル、流域面積はその約十倍にもなる。首都圏に位置する霞ヶ浦は、水質の汚濁や漁業の衰退、森林の減少、人口の増加などの問題を抱えている。特に工業化や都市化に応じた水資源の大規模な開発により、湖岸はコンクリートで固められ、水門が閉鎖にされて海との連続性が絶たれた。森林やため池などの身近な水源が失われつつあり、流入する水質も悪化している。これまで、行政は個別の施策や事業を行ってきたが、抜本的な改善には至っていない。わたしたちNPOは、このように多様な問題を抱える広大な地域を対象とし、行政と全く異なる独自の戦略による環境保全と地域振興を展開している。

1995年に始まったこの「アサザプロジェクト」は、湖岸植生帯の復元、放棄水田を生かした水質浄化、水源の山林の保全などを、環境教育や保全生態学の先端研究と一体化しながら流域全体で展開している。この事業は「市民型公共事業」と呼ばれており、現在までにのべ7万1千人をこえる市民、農林水産業、学校、企業、行政などの多様な主体が参加し、生物多様性の保全を通じて健全な水循環や生態系の物質循環を達成していくための新たな社会システムの構築が進められている。

2. Description of the Problem and Action as Implemented

(問題と実施されている取り組み)

霞ヶ浦は日本で2番目に大きな湖で、湖面積は220平方キロメートル、流域面積はその約十倍にもなる。首都圏に位置する霞ヶ浦は、水質の汚濁や漁業の衰退、森林の減少、人口の増加などの問題を抱えている。特に工業化や都市化に応じた水資源の大規模な開発

により、湖岸はコンクリートで固められ、水門が閉鎖にされて海との連続性が絶たれた。森林やため池などの身近な水源が失われつつあり、流入する水質も悪化している。これまで、行政は個別の施策や事業を行ってきたが、抜本的な改善には至っていない。

わたしたちNPOは、このように多様な問題を抱える広大な地域を対象とし、行政と全く異なる独自の戦略による環境保全と地域振興を展開している。

1995年に始まったこの「アサザプロジェクト」は、湖岸植生帯の復元、放棄水田を生かした水質浄化、水源の山林の保全などを、環境教育や保全生態学の先端研究と一体化しながら流域全体で展開している。この事業は「市民型公共事業」と呼ばれており、現在までにのべ7万1千人をこえる市民、農林水産業、学校、企業、行政などの多様な主体が参加し、生物多様性の保全を通じて健全な水循環や生態系の物質循環を達成していくための新たな社会システムの構築が進められている。

2. Impact of Implemented Action (取り組みの影響、効果)

アサザプロジェクトは、コンクリート護岸で破壊された湖岸植生帯を回復することから始まった。浮葉植物アサザをはじめとした在来水草を小学生や市民が育て、植え戻す。これは高価な施設も多大な費用も必要としない、人の「手」で実施可能な公共事業であると同時に、人々が湖に直接触れて理解する重要な環境学習の機会となっている。さらに約100校の小学校にピオトープ池を設置し、在来の水草を育てるとともに、本来の湖の自然を体験理解したり、学区内から集まってくる生物を調べたりする環境教育の場を提供している。水草が根付くのを助けるため、NPOが流域の木材を使った消波施設を提案し、これが国の公共事業として採用されている。アサザ基金が流域の林業関係者と国の調整役になることで、荒廃が進んでいる森林の管理と湖での自然再生とが同時に実施する仕組みができた。これによって、水源林の保全と林業の活性化、新たな雇用の創出などの効果が生まれている。木材を使った消波施設は魚礁となり、水産資源の保護育成にも役立っている。なお、この土木技術は日本の伝統技術を基にしている。

このほかにも、農業用ため池の復元、農家との連携による休耕田を活用した水質浄化、地方自治体と連携した流入河川的环境改善などを行っている。このように、本来つながっているはずの湖、川、水田、森林等に対して行政がばらばらに行っていた公共事業をNPOが相互に連携させることで、事業の効率化と新たな事業展開を実現している。

3. Stakeholder Participation (利害関係者の参加)

アサザプロジェクトには、中心となる組織が存在しない。中心にあるのは協働の場であり、緩やかなネットワークを通じて各主体が自らの目的を達成することで、環境保全が内部目的化される仕組みになっている。各主体は、環境保全を義務や規制とみなすのではなく、自らの事業を活性化するものとして積極的に取り入れるようになる。このような協働の場のコーディネーターを行うのがNPOの役割である。

広域ネットワークの構築には、地域にある既存のネットワークを生かしていく。たとえば農林水産業のように地域の自然環境と産業を単位としたネットワークや小学校区のように地域コミュニティを単位としたネットワークである。アサザプロジェクトでは、流域の9割を越える170の小学校が参加して、国が行う霞ヶ浦での自然再生事業に必要な在来水草の育成や植え付け作業、お年寄りと共に行う昔の環境調査(自然の復元目標の設定)、流域全域での生物モニタリング(インターネットで全小学校が連携・流域管理システム)等の活動を、地域住民も参加する総合学習の一環として行っている。一連の事業は保全生態学の最先端の知見に支えられていると同時に研究のフィールドとして活用されている。このように協働の場を共有することで、異なる組織による環境保全、教育・人材育成、科学研究、地域振興が一体となって行われている。

4. Sustainability (持続性・再現性)

20世紀は人間が力づくで自然や社会をコントロールしようとして、多くの自然破壊や公害、貧困や紛争を引き起こしてきた時代だった。アサザプロジェクトでは、自然の回復にも社会の変革にも、力づくの手法をとらない。既存の社会システムに環境保全機能を組み込むことによって面的な展開を促し、既存の組織に対して、環境保全の軸から新たな価値を見出す。そのことを通じて、社会全体にゆるやかで深い変革をもたらす。

アサザプロジェクトは100年の長期計画である。10年ごとの達成目標を具体的な野生生物の設定している。それぞれの生物は湖と流域に再生する環境要素とそのために必要な施策を総合化するものとして示した。

100年後の目標は、日本の近代化100年の中で野生絶滅させられたトキである。100年前の足尾鉍毒事件(日本の公害事件の原点)、水俣病の公害事件の中で、人々が必死になって闘い守ろうとしたもの、取り返そうとしたものを、トキの舞う風景の中で形にしていきたい。

地域にある既存の社会システムを生かし、地域の人材や組織、資源、技術を活用して環

環境保全と両立した地域振興を進めるこのような戦略は、霞ヶ浦と共通の課題を抱える発展途上国においても導入が可能であろう。

5. Commitment (展望)

2000年から、霞ヶ浦と並ぶ関東地方の二大湿地「渡良瀬遊水地」を再生する「わたらせ未来プロジェクト」が始まり、二つの湿地の連携によってコウノトリやトキの野生復帰を将来実現するための計画が進められている。

ここではアサザプロジェクトと同様に、下流の地場産業（ヨシズ業）と上流足尾山地の公共事業（森林再生・治山）とを連携させて、流域の総合的な環境再生事業を行い、同時に地域の活性化を実現しようとしている。

この地は、日本の公害事件の原点、足尾鉍毒事件が生じた地域である。上流の山林が荒れ、下流の住民は甚大な鉍毒被害や洪水被害を受けた。また、この地は、日本で最初の環境保護運動が行われた地域でもある。公害と闘った田中正造の思想は、いまでも環境保護運動に影響を与え続けている。

現在、渡良瀬遊水池（3300ヘクタール）には絶滅に瀕した生物が数多く生息している国内最大級のヨシ原があり、このヨシ原は地場産業のヨシズ業によって維持管理されてきた。しかし、近年は輸入ヨシズに圧されてヨシズ業が衰退しているため、ヨシ原の管理の継続が難しくなっている。そこで、渡良瀬遊水池のヨシを上流の足尾での土壌流出防止に活用したり、ヨシを堆肥にして足尾のドングリを育て、山に植え戻す取り組みが始まっている。これらは小学校の学習の一環として開始され、林野庁との共同実験も始まっている。

6. Originality and Innovative Ideas (独自性、革新的な考え方)

アサザプロジェクトの戦略は、これまでの行政主導による事業の進め方とはまったく異なる。その戦略とはまず、地域に元々あった産業や教育といった広がりをもつ社会システムに環境保全機能を組み込むことで、水循環や生態系の物質循環を意識した人やモノやお金の動きを作り出し、地域に則した循環型社会を構築していくことである。そのことによって湖と流域全体を対象とした事業が展開できる。

また、中心を持った組織ではなく、協働の場（アサザプロジェクト）をもった緩やかなネットワークを構築していることである。これにより、ネットワークに参加した各主体が、

それぞれの組織の目的を達成することが同時に他者にとってもプラスになり、環境の保全と地域振興の両立が持続的に可能となる。

これらの広域かつ総合的なプロジェクトの実施は、従来の組織では不可能なものであり、生活者の視点を持ったNPOという新たな主体が社会に登場したことによって初めて実現した。

このような事業を支える技術は、人格を持った技術である。それは短期的な効率性だけに目をうばわれるのではなく、技術が及ぼす自然的・社会的影響への想像力を備えた技術である。アサザプロジェクトで伝統技術を重視するのはそのためである。

アサザプロジェクトは、科学や技術のあり方にも変革を促しながら、新たな社会システムの構築を通じて21世紀にふさわしい「生き方」をうみ出していく、市民の提案による創造的な取り組みである。